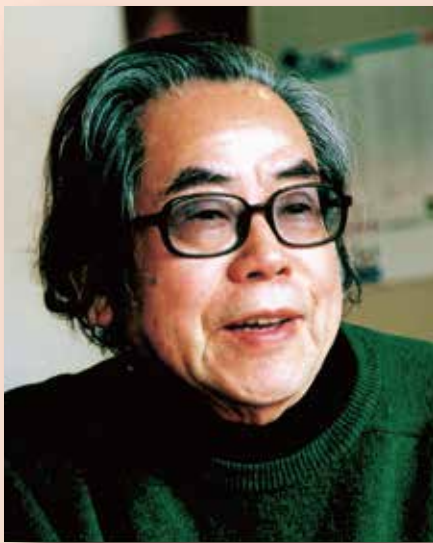




小説

ふるかわ かおる
古川 薫

下関市・宇部市
(1925～2018)



提供・吉岡一生

【著作】

『砲煙の海』（昭和39・午後同人会）
『漂泊者のアリア』（平成3・文藝春秋）
『わが長州砲流離譚』（平成18・毎日新聞社）

ほか

【閲覧情報】

下関市立近代先人顕彰館（田中絹代ぶんか館）

古川家は本来広島県の旧家であったが、薫の父がエンジニアで当時下関の旧国鉄幡生工機部に勤めていたことから、大正十四年六月五日下関市大坪町で出生。

六歳の時一家は宇部市に移住し、薫は県立宇部工業高校を卒業。小学生の頃から作文が得意であったが、戦時中でもあり、父と同じエンジニアを志して飛行機製造会社等に就職。昭和二十年に召集され、陸軍の航空通信兵となり沖縄に向かう直前に終戦となる。

その後再度勉学に挑戦し、山口大学教育学部を経て、母校の宇部市立神原中学校の教壇に立つ。この間山口県の懸賞小説で佳作に選ばれたことなどもあり、文学への夢を育んでいく。

昭和二十九年、下関市に本社のある、現・みなと山口合同新聞社に転職。新聞記者の仕事の傍ら、地方の同人誌に作品を発表し始める。

その文学活動が本格化するきっかけは、市政担当記者として活躍中に知己を得た中原雅夫や清水唯夫等と、昭和三十六年、同人誌『午後』を創刊したことにある。

昭和三十三年、『砲煙の海』を『午後叢書』として出版。昭和四十年、『午後』十号に発表し同人雑誌推薦作品として『文学界』に転載された『走狗』が、直木賞候補となり大きな注目を集める。

受賞には至らなかったが、ここに直木賞という目標を得て、筆一本でやっていこうと決意したのが四十五歳の時であった。以後文筆活動に専念し、精力的に作品を発表。

平成三年、『漂泊者のアリア』で待望の直木賞を受賞。下関に所縁の深いオペラ歌手藤原義江の生涯を描いた作品で、平成五年にオペラ上演された。

昭和四十一年、海外取材の折、パリのアンヴァリッド軍事博物館で攘夷戦の戦勝品として持ち帰られた長州砲を発見。その返還運動を展開して奔走し、実現させる。その実物は現在、下関市立歴史博物館に展示され、来館者は親しくその雄姿を目の当たりにすることができる。

作家活動のみにとどまらず、地域の多岐に亘る文化振興に尽力を惜しまなかった足跡は大きい。平成二十八年、取材中の転倒事故で入院後、額に悪性腫瘍のあることが判明し加療を余儀なくされるも、病床で意欲的に執筆に専念。翌年、『維新の商人 語りだす白石正一郎日記』を出版。

単行本として百二十三冊目に当たるもので、最後の仕事となった。

（文・清水唯夫）



古川薫文学碑・東行庵（下関市吉田）提供・吉岡一生



直筆色紙 提供・吉岡一生

『維新顕彰モノメント』碑文

青春交響の塔

慶応元年（一八六五）の太陽が
東経一三一度の子午線上に燃え、
戦う青春の交響詩が轟く時、
歴史の海流は天にむかつて、
怒濤の水柱を噴き上げ
無限の時空へ変革の恐竜を這わせた。

維新史を旋回させたふたつの雄魂。

その名

高杉晋作

その名

坂本龍馬

慶応二年（一八六六）のうしおを押し流す
関門海峡のほとりで演じられた
日本史の名場面を記念して石に刻み、
あの日、両雄が夢見た
豊かな永遠の未来をつらぬく
創造の糧としたい。

平成十五年（二〇〇三）夏

古川

薫

古川 薫 年譜

（提供・清水唯夫）

大正14（一九二五年）	六歳
昭和6（一九三二年）	二二歳
昭和23（一九四八年）	二二歳
昭和27（一九五二年）	二七歳
昭和28（一九五三年）	二八歳
昭和29（一九五四年）	二九歳
昭和35（一九六〇年）	三五歳
昭和36（一九六一年）	三六歳
昭和39（一九六四年）	三九歳
昭和40（一九六五年）	四〇歳
昭和41（一九六六年）	四一歳
昭和45（一九七〇年）	四五歳
昭和48（一九七三年）	四八歳
昭和49（一九七四年）	四九歳
昭和52（一九七七年）	五二歳
昭和55（一九八〇年）	五五歳
昭和56（一九八一年）	五六歳
昭和57（一九八二年）	五七歳
昭和59（一九八四年）	五九歳
昭和60（一九八五年）	六〇歳
昭和61（一九八六年）	六一歳
昭和63（一九八八年）	六三歳
平成元（一九八九年）	六四歳
平成3（一九九二年）	六六歳
平成13（二〇〇二年）	七六歳
平成14（二〇〇三年）	七七歳
平成16（二〇〇四年）	七九歳
平成18（二〇〇六年）	八一歳
平成22（二〇一〇年）	八五歳
平成28（二〇一六年）	九一歳
平成29（二〇一七年）	九二歳
平成30（二〇一八年）	九二歳

6月5日、下関市大坪町に三男として生まれる。

父親の退職に伴い、宇部市に移住。

橋本稔（利）子と結婚。俳誌『真青』創刊に参加。

宇部市立高等学校（現 山口県立宇部中央高等学校）定時制に編入学し、担任教師の中野真琴から小説の手ほどきを受ける。

山口県懸賞小説に応募し、佳作となる。

山口大学教育学部卒業。宇部市立神原中学校教諭（国語）となる。

みなと新聞下関本社入社。

筆を折る決心をするも山口大学の恩師・小林茂大に「無能にしてこの一筋に繋がるという覚悟」を説かれ、思い直す。

中原雅夫、清水唯夫らと同人誌『午後』を創刊。

6月、『砲煙の海』（午後同人会）を出版。

同人誌『午後』NO. 10に発表した『走狗』が同人誌推薦作として『文学界』に転載、第53回直木賞の候補となる。

新聞社の特派員としてカナリア諸島に派遣される。赴任する途中、パリのアンヴァリッド軍事博物館で長州砲の存在を確認、返還運動を提唱。

5月、新聞社を退社し、文筆生活に入る。日本文藝家協会入会。

同人誌『午後』NO. 20に発表した『女体蔵志』が第70回直木賞の候補となる。

同人誌『狼群』NO. 4に発表の『塞翁の虹』が第72回直木賞の候補となる。

10月、『十三人の修羅』（講談社）を出版。同作が第78回直木賞の候補となる。

『刀痕記』（オール讀物）7月号「きらめき侍」『小説新潮』7月号が第84回直木賞の候補となる。日本ペンクラブに入会。

山口県選奨（芸術文化功労）を受賞。

『暗殺の森』（講談社）が第86回直木賞の候補となる。

1月、妻・稔（利）子逝去。3月、古川稔子遺歌集『蝶道』出版。

歌人・森重香代子と再婚。

2月、『異聞 岩倉使節団』（新潮社）を出版。

10月、『歌文集 周防長門はわがふるさと』（創元社）を森重香代子との共著により出版。

5月、『幻のザビーン』（文藝春秋）を出版。同作が第100回直木賞の候補となる。

1月、『漂泊者のアリア』（文藝春秋）を出版。同作が第101回直木賞の候補となる。

下関市芸術文化奨励賞特別賞を受賞。

NHK山口放送文化賞を受賞。

2月、『花も嵐も―女優・田中絹代の生涯』（文藝春秋）で単行本100冊目。尾崎秀樹記念大衆文学研究会賞特別賞を受賞。

第63回西日本文化賞を受賞。

東行庵（史跡・高杉晋作墓所）に古川薫文学碑が建立される。

第2回山口県文化特別功労賞を受賞。

下関市立近代先人顕彰館名誉館長に就任。

額に悪性腫瘍のあることが判明。執筆活動を続けながら闘病生活へと入る。

11月、『維新の商人 語り出す白石正一郎日記』（毎日新聞社）を出版。

5月5日、下関市内の病院において逝去。下関市長府の功山寺に眠る。

【参考文献】『わが風塵抄』（古川薫文学碑建立発起委員会刊／2006年6月発行）

古川 薫